

昭和三年五月一日發行（毎月一回一日發行）

筆主雄常澤金

# 信望愛

月五年八二九一

創刊號

富士山に寄す

十字架の福音

ヨブ記の精神（上）

信仰餘瀝

日本國と基督教

## 富士山に寄す

(發刊の辭に代へて)

われ武藏野に住所を定めてより、富嶽よ、汝は朝毎にわが親しき友である。

「われ山に向ひて眼をあぐ、わが援けは何處より來るや。わが援けは天地を創り給へヌエホバより來る」

(詩一二二篇)

汝は眞白き雪を衣として獨り高く聳え、旭光を浴びて金色に輝く。まことに汝は日本の代表者である。日本の眞精神は汝に表徴されてゐる。汝は曾て豫言者の如く火を吐き此民を警醒した。今は眞の基督者の如く靜かに待望する。けに汝は眞の信仰の人の姿である。野に呼ぶ聲である。キリストを待つ者である。あゝ汝の忍耐の長かりし事よ。されど今や時は來た。たとへ現代日本が憂うべき思想上の淺薄と生活の不安と道德的暗黒に包まるゝとも我は汝の故に失望しない。日本の救ひは近い。されば我も亦汝の如く土の器に過ぎねど、なほキリストの義の衣をまとひて高く聳えたまかな。惱みの深淵より十字架を仰がんかな。而してキリストの光に照され信。望。愛の嘉信を宣べ度きかな。あゝ聖靈の神よ、聖意を寫さしめよ！

## 十字架の福音

——使徒パウロを憶ふ——

○使徒パウロ！如何に慕はしき名であるか。その宗教的天才の名聲の故に慕はしいのではない。キリストの十字架の外に誇る所を知らざりし信仰の故に限りなく慕はしい。小さき私の信仰はあまりにも多くを彼に負うてゐる。涙と靈感なくして彼の書簡を読むことは出来ない。

○イスラエルの血統、ベニヤミンの族、ヘブル人より出でたるヘブル人、律法によれる義に就ては責むべき所なかりしパウロである。然し彼は律法の形式的遵守を以て安んぢ得なかつた。律法は遂に彼をして罪を自覺せしめた。之に伴ふ彼の悩みは日々に増加するのみであつた。「誠命いんまじきたりし時に罪は生き我は死にたり」。私は自分の青年時代を顧みて涙なきを得ない。「わが欲する所の善は之をなさず、反つて欲せぬ所の惡は之をなすなり」であつた。内心の分裂である。凡そ人生に於ける悩みの最も深刻なるものである。凡て純潔を渴求する熱烈なる道德的靈魂は茲に行詰る。「あゝ我惱める人なるかな、此の死の體より我を救はん者は誰ぞ」と彼は罪の深淵より天に向つて叫んだ。私はロマ書七章を讀んで其中に私自身の呻きを聴くのである。

(1)

(1)



(4)

テ前書一章一五)と言へる事がうなづかれる。「首なり」(原語。εἴς)と現在動詞を用ゐる。彼は單に過去の經驗とせず現實の實感として記してゐる。「曩には瀆す者迫害する者、暴行の者なりし」と言ひ「信ぜぬ時に知らずして行ひし故に憐憫を蒙れり」と説明してゐる。彼は基督教徒迫害の狂暴を終生忘れず、最大の罪人なりとの自覺を日々新たにした。加ふるに信者となりて後も不斷に自我との戦ひをなした。其度毎キリストを仰いだ。彼は十字架の恩恵をひし／＼と感じて已まなかつた。他の書簡に「我は聖徒中の最小者よりも小き者」(エペソ書三章)といひ或は「使徒中の最微者」(コリント前書十五章)と述べてゐる。使徒中の最微者、クリスチャン中の最小者、罪人の首、然り人類中の最も罪深き者、かかる自覺が彼の一生を一貫した。謙遜といふ丈ではない。彼にとりては已むに已まれぬ告白である。恩恵に感泣するが故に黙すを得ないのである。○彼の如くに悩みし者にとりて十字架以外の何處に平安があらうか。若しキリストの啓示なくば彼は罪の苦痛の極みに於て鬪死した事であらう。彼は償ひ難き己が罪を回想する度に大いなる不安に襲はれたであらう。またキリストを信じつゝも、心ならずも罪に捉へられ深刻に悩んだであらう。然し直ちに彼は十字架を仰いだであらう、之によりて人の思に過ぐる平安は彼の全心に注がるのであつたらう。視よ、彼の經驗は全く私の經驗であり、凡て惱めるクリスチャンのそれである。この經驗の進むにつれて「最早われ生くるに非ず、キリスト我に在りて生くるなり」と

(4)

(5)

叫び「若し義とせらるること行爲によらばキリストの死に給へるは徒然なり」と斷言し得るにいたつたのである。信仰以外に救はない。律法は善であり聖であるが彼を救はなかつた。彼の善行の一切も彼の平安とならなかつた。天上天下、キリストの十字架の外に罪の赦免の證據はない。また彼の復活に依らでは我に義と愛と潔き生涯は生れない。信仰が凡てならば律法道德は如何になるかと多くの人は疑ひを挟む。信仰と共に自己の行爲も必要であるといふ。然し道德は命令するけれども實行力を與へない。信仰は實行力を與へるのである。信仰のみが律法(道德)の要求を充たすのである。然り律法を堅うするのである(ロマ書三章末節)。信頼これ救ひの全部である。

されば彼はたゞ十字架を誇りとした。救の泉は自己から湧かない。自己は暗黒そのもの、聖きこととに就てさへ自己を誇らんとする程に自己は神の前に高慢である。自己に碎かれし彼にとりては最早たゞ十字架。たゞキリスト。かくしてあらゆる苦難と迫害の中に立つて「キリストの愛より我を離れしむる者は誰ぞ」と凱歌を奏した。コリント前書に於ては「ただイエス・キリストと其の十字架の外は何をも知るまじ」とさへ言つてゐる。彼はロマの獄よりピリピの一團に書を送りて言ふ「我が願は寧ろ世を去りてキリストと偕に居らんことなり」と。誠に彼にとりて「生くるはキリスト」死ぬるも益であつた。これみな彼の血と涙の體驗による叫びである。

○されば救とは恩恵に對する信頼である。罪の赦免(義)も、聖潔(聖)も、最後の榮化(救贖)も

(5)



凡てこれ信仰によりキリストに由る（コリント前書一章三〇）。この恩恵の前に自己の罪も自己の善行も何するものぞ。故にこの恩恵を空うせざらんことは彼の一生の念願であつた。若し救ひが己が行爲によりて獲得せらるゝものならば十字架は最早恩恵ではなくなる。萬人が信仰によりて救はる。これ誇る者のなからん爲である（エペソ二ノ八、九）。されば彼は十字架に敵して歩む者（僞信者を指す）のことを思つて熱涙を注いだ（ピリピ三ノ一八）。多くの人は自己の爲に宗教を求め悔改めて自分を幸福にしようと思つて考へ常に自己中心に傾くのである。然しパウロにありては救は自己をキリストに委ねることであり、キリストに生くることであつた。まことに彼にとりて神の御前に於ける彼自身の罪（及び人類全體の罪）は狂へる火である。然し感謝すべきかな、キリストの十字架は信する彼にとりては此の火を消し得て餘りあるものであつた。

○この故に彼は恩恵の下に甘き眠りをむさほることが出来なかつた。彼は歡び勇んで十字架の戦に参加した。最早彼の努力ではない。己むに己まれぬ奉恩の念よりである。かゝる絶大の恩恵をいかで己れ一人のものとしてとどめ得やう。さればキリストの愛われをかく捉へたればなり」と言ふ。溺れんとする友を救はんとして自己の危険を忘れて水に飛び込む人の如くに、彼は惱める人類同胞の中へと飛び入つた。彼の苦難多き傳道の生活を視よ。然し私は彼の活動により彼を價値ありとしてはならぬ。彼の働きの動機の純眞さを視よ。（今日の傳道者凡てがパウロの如き

純眞なる信仰を常に把握しむたらんには！ 今日の如き教會の俗化は生ぜざりしものを嗚呼！）我は福音を恥とせずといひ、福音を宣べずば我は禍ひなるかなと叫ぶ。イスラエルの救はれん爲には我は詛れてキリストに棄てらるゝも願ふ所なりと言ふ。ああ羨しきかなパウロ、彼はキリストの恩恵に感激したのである。罪の詛ひより救ひ出されたることに對する報恩の念は彼をして、其の主に倣ひてあらゆる苦難と十字架とを甘受するに至らしめた。これ「キリストとその復活の力とを知り、又その死に效ひて彼の苦難にあづからん」ため。また「其身をもてキリストの教會の患難の缺けたるを補はん」ため。常にイエスの死を身に負ふ」のであつた。最早これは義務の念からではない。感恩の念に溢れての事である。何等報酬を求めない。成功を求めない。結果を焦慮しない。キリストの生命によりて強められたる意志の聖き志望によるのである。且つたえず注がれ来るキリストの愛が彼を動かすのである。恩恵（他力）と自由意志（自力）との美しき調和である。眞に能力ある生活である。さればピリピ書三章に言ふ「キリストは之を得させんとて我を捉へたまへり（恩恵）……唯この一事を務む（自由意志）……神のキリスト・イエスに由りて上に召し給ふ召にかかはる褒美を得んとて之を追求む（兩者調和）」と。

○彼はキリストの愛に勵まされて、歡んで多くの苦難を負ひ福音を宣へ傳へた。しかも其の能力の來るところを忘れなかつた。「凡ての使徒よりも多く働けり、これ我と偕にある恩恵によれり」



といひ「我衷に能力を以て働き給ふ者の活動に従ひ」といふ。更に「我に能力を與ふる者（キリスト）によりて凡てのことを爲し得るなり」とまで確言してゐる。ああ只管キリストの恩恵に生き、其十字架のみに頼りし彼は眞に偉大なるかな。

○終りに私は彼の實驗の言葉より特に次の二事を學び度い。第一は「凡て勝を争ふ者は何事をも節し慎む……わが體を打擲きて之を服従せしむ。恐らくは他人に宣傳へて自ら棄てらるる事あらん」(コリント前書九章)といふ一句である。(此句に對して私の自我は碎かれる！)

○之ありしが故によく愛の勞苦を爲し得たのである。信すること丈けで一切である。然し主の愛を受けし者は亦た自己を十字架につけずしてはやむことが出来ない。視よ、主はパウロをして福音のために一切を忍ばしめ多くの苦難を味はしめ己れの體を打擲かした。主の爲に己れを捧げし者はこの勞苦をせねばならぬ。世は今も罪に惱む。キリストは今も十字架を負ひつゝあり給ふ其の恩恵に浴せる者、あゝいかで飽食暖衣して可ならんや！ 主凡てを知り給ふ。凡ての基督者をして今一度主の十字架を仰がしめよ！ 主の御前に朝に夕に或は夜半に碎けたる靈魂の祈りが捧げられ、且つ日毎己が肉慾と戦ひ、惡しき念を克服し、御靈に由りて潔き生涯に導かるゝ事の如何に望まじきかな！ 私亦キリストの愛に感激して勇躍して自己を十字架につけねばならぬ。視よ、パウロは恩恵の下にありて恩恵に押れない。罪に耽るの餘暇はない。畏れおのゝきて、お

のが救を全うするのである。彼は罪の憎むべくおそるべきを痛感する。それにもまして主の十字架の御愛に涙を以て感謝した、故に彼は恩恵を高調しつゝも決して之に溺れなかつた。己むに己まれずして自己の體を打擲いたのである。御靈よ、弱き吾らを援け給へ。

○第二は次の句である「我は……高ぶる事の莫らん爲に肉體に一つの刺を與へらる。即ち高ぶること莫らんために我を撃つサタンの使なり。われ之が爲に三度まで之を去らしめ給はんことを主に求めたるに言ひ給ふ『わが恩恵汝に足れり、わが能力は弱き中に全うせらるればなり』」さればキリストの能力の我を庇はん爲に寧ろ大に歡びて我が微弱を誇らん。この故に我はキリストの爲に微弱、恥辱、艱難、迫害、苦難に遭ふ事を歡ぶ、そは我弱き時に強ければなり(コリント後書十章)彼に残されし「肉體の刺」とは何であつたらうか。その何でありしかは知る由もないが、然し肉體を通してあらはれたる大いなる惱みであることはたしかである。大いなる苦痛であり、それが平安をさまたげ、傳道を妨げ、言ひがたき試鍊であつたと思はれる。(信者には何かの形で刺が與へらる)。幾度も彼は主に祈つた事であらう。其の中から彼は「弱き時に強し」との信仰の奥義を學んだ。あゝこれ信仰の能力である。吾らにも信仰さへあらば足りる。芥子種の信仰にてよい。眞實なる信仰とは自己引渡である。神意の儘になることである。嬰兒の母に對する如く。弱き事が妨げとならない。ヨブの如き強き信仰がなくも、エレミヤの如く信頼すればよい。反つ



てキリストの能力は弱き中に全うせらるゝのである。不可解な悩みや刺の與へらるゝ時に吾らもパウロの如く主の御答を待ち度い。されど茲に更に注意すべきは、彼が其の「微弱」を知りて大いに歡び、キリストの能力を仰ぎ、進んで彼自身をキリストの爲に捧けたる一事である。あゝ、記せよ、パウロは特に「この故に我はキリストの爲に微弱、恥辱、艱難、迫害、苦難に遭ふ事を歡ぶ」といふ。「此の故に」と力強く言ひ更に「キリストの爲に……」といふ。斷じて、自己の爲にはない。彼は弱き中に全うせらるゝキリストの能力により、キリストの爲に一層の勞苦を捧げ奉らんと決意した。實に健氣なる、悲壯なる、沈痛なる決意である。主の爲に一切を捧けたる彼として適はしき覺悟である。實に勇らしき信賴と奉仕！吾らも亦、各自の立場にありてかゝる境地に進み度きかな。

○私はいとも小なる主の僕にすぎない。私も亦「罪人の首」である。私の生涯の經驗の進むと共にこの自覺は益々痛切に深められる。私はキリストの十字架無くして一日、否、一瞬も生きられない。キリストはたゞに私の罪の贖主であり給ふのみならず、現在私の心ならず犯す罪の執成しをなしたまふ（ヘブル書七章二五）。私の生くるはキリストである。一切の平安の基礎はこゝにある。然しながら私も亦恩恵を私にとどめたくない。罪人のかしらなる私さへも救はるゝならば信する凡ての人が救はるゝのである。之を宣べずば禍である。この小雜誌も亦この祈願より生れた。

私は主の十字架のみを誇り度い。聖書の福音のみを證したい。恩恵に賴り自己を打擲き「わが刺」のため祈らん。そして更に御意ならば、わが弱きを知るに止らずしてキリストの爲に一切を捧げて愛の勞苦をなし度い。私は神意と信じて牧師の地位を退いてからもう半歳を経た。自己の微弱なることについては最早餘りに多く知りえた。然し徒らに自己解剖に耽るも甲斐ない。自己より何の善きものも出でざるは明かである。私は信賴せねばならぬ。キリストを視つめて波の上を歩まねばならぬ。彼は微弱なる私の心に聖靈を注ぎて強めたまふ。御能力は豊かに働き給ふ。されば私は寧ろ大いに歡びてわが微弱を誇り全信賴を以て十字架の福音を宣べねばならぬ。私は愛する日本のために主の御名を叫ぶ。土の器にも榮光の寶はもられた。紅海は渡つた。背水の陣である。曠野の叫びである。主イエスよ、我を遣したまへ。

我をあはれみ給へ。神よ。我をあはれみ給へ。わが靈魂は汝を避所とす。われわざはひのすぎ去るまでは汝の翼のかけを避所とせん。我はいと高き神によばはん。わがために百事を成しをへ給ふ神によばはん（詩篇五十七篇）

June  
20-78



## ヨブ記の精神 (上)

ヨブ記の精神は何であるかといふにそれは信仰の何たるかを實證する所にあると思ふ。即ち神を信する眞の姿をばヨブといふ人物を以て實證するのである。

先づ發端に於けるエホバ對サタンの間答に於て「ヨブめに求むることなくして神を畏れんや」(一ノ九)とサタンの答へたるところに本書の精神を理解するに足る鍵がある。換言すればサタンによれば「人が神を信するのは畢竟自己の爲めである。自己の安心のため幸福のため、一家一國はた人類の幸福のためである。神に絶對に服従して、神の御意ならば自己を犠牲にしてかへりみないといふ様な神第一の信仰といふものは有るものでない。人間は神を信するといひながらつまり神を自己のために用ゐて居るのである。自己が主で神は従である」と。サタンはヨブより一切の幸福が奪はるゝならば必ず彼は其の信仰を棄てるにきまつて居ると考へるのである。

汝彼とその家およびその一切の所有物の周圍にまがきを設け給ふに非ずや、汝かれが手に爲すところを盡く成就せしむるが故にその所有物地に偏ねし、されば汝の手を伸べて彼の一切の所有物を撃ちたまへ。さらば必ず汝の面に向ひて汝を詛はん(一ノ一〇)

(12)

(12)

こゝにヨブに對する試鍊がはじまる。即ちヨブ記は要するにサタンの見解に對する反證である。即ち眞の信仰の何たるかの實證である。

第一の試鍊は彼の所有物(牛、牝驢馬、羊、駱駝)及び子女(男七人、女三人)を奪ふことによりてあらはれた。然し彼は

われ裸にて母の胎を出たり、又裸にて彼處に歸らん。エホバ與へ、エホバ取り給ふなり、エホバの御名は讃むべきかな(一ノ二二)と述べて絶對の服従をなした。彼は神を第一となしてゐた。純眞偉大の信頼である。

(13)

(13)

然るにサタンはなほも執拗に迫る、即ちエホバに向つて言ふ。皮をもて皮に換ふるなれば人はその一切の所有物をもて己の生命に換ふべしされど今汝の手を伸べて彼の骨と肉とを撃ちたまへ、さらば必ず汝の面に向ひて汝を詛はん(二ノ四、五)かくて第二に彼自身にいまはしき癩病が発生した。妻も耐へかねて言つた「汝はなほも己を完うして自ら堅くするや神を詛ひて死ぬるに如かず」と。神に忠實なる我が夫に此の慘狀である。妻の懷疑に同情すべきものがある。然しヨブは動搖せずしていふ。

我ら神より福祉を受くるなれば災禍をも亦受けざるを得んや(二ノ一〇)茲に於てか彼の信仰が自己中心にあらざりし事がいよく明白である。



然しヨブと雖も人である。ときがたき悩みの中に曝され幾週かは経た、彼に親しかりし者も彼を避けて遠ざかる。たま／＼遙々砂漠を超えてたづね來りし親友三人も彼の深き悩みを理解し得ず。神に棄てられたるの思ひのために悲嘆のあまり親友の前にその抑へかねし叫びを曝發せしむるや、遂に友らは全く彼が大なる罪惡と過誤に陥れるものと誤解して彼の不信を攻める。

誰か罪なくして亡びし者あらん。義しき者の絶れし事いづくにありや。我の見る所によれば正義を耕へし惡を播く者はその穫る所も亦かくの如し(四ノ七、八)

之が友の見解であつて、友らはあくまで彼がかくれたる罪惡のためにかくは神の刑罰を蒙りしものと解するのである。

友の無理解と冷酷とはヨブを失望せしめた。悩みは深刻である。底知れざる孤獨である。

わがたすけわが中に無きにあらずや。救ひ我より逐はなされしに非ずや。うれひに沈む者はその友これを憐れむべし(六ノ一三、一四)

と言つて彼は友の無情をうらむ。彼の悩みは實に彼の患難の理由の不明なるにある。彼は罪を犯さないのである。勿論彼と雖も人であれば絶対に罪なしといふ事は出来ない。ヨブ自身もそれを認めてゐる。然し彼に殊更なる罪はない。彼は忠實なる神の僕であつた。然るに彼にこの堪へがたき悩みが臨みあまつさへ神に棄てられたるの實感が彼を益々壓したのである。神が彼の敵とな

り彼の祈を聽かず彼の願を斥けた。神が彼を苦しめ悩ます事をよろこびたまふと考ふる外は無。實に事實さうであつた。されば彼は暗中に光を求むる人の如く靈魂の暗さにたへかねたのである。エレミヤやルーテルやダンテやベートーヴェンにかゝる悩みがあつた。

神を怒らせ自己の手に神を携ふる者は安泰なり(十二ノ六)

悪人はかへつて榮ゆるが此世である。ヨブはこの謎のために苦しんだ。然し彼は全く神を離れたのではない。彼の友等が考へたやうに信仰を失つてしまつたのではない、また祈求をやめたのではない。神を誣ひ棄てたのではない。彼の心は神にすてられ、神に挑まれつゝもなほ神を呼び神に執着し神に向つて喘ぐのである。彼が生れし日をのろひ神の正しき統治に對し疑ひを述べぶるが如く見ゆるものは全く彼の悩みのあまりに絶大なるがために之にたへかねたのであり、神が御顔をそむけたるによりて彼が神より來る平安を失ひたるによる。母を失ひし嬰兒は乳を求めて泣かざるを得ず、靜かに待つべしと忠告する者があやまつてゐる。泣くは愚かと思え不信仰と言はれ充奮と解されるれどこれ反つて自然であり誠實であり眞に人間であり、切なる祈求である。眞實を以て神に従ふ者に屢々かかる重き悩みが臨むのである。



## 信仰餘瀝

○艱難は私にたへがたい。然し若し私に之が臨まざりせば私は自己満足者として終つたであらう。現世が私を充たしたであらう。然し私は艱難によりてキリストの御懷に追ひやられた。今も艱難は私にふさはしい。之ありて「悲哀の人」なるイエスは私に最も慕はしき人にてあり給ふが故に。

○今や私はキリストの測り難き恩恵のほかは考へまじい。自分で聖くならうとする野心を棄てやう。キリストが私を深くして下さるのである。私は修道院に入るを要しない。たゞキリストを信すれば足る。彼は罪人の心に住所を定め給ふのである。ルーテル曰く「次の事位たしかな事はない、即ち信仰によりてキリストをつかみ、キリストは彼の爲に証はれ給へり」と信じて慰むる者でないならばなほ証ひの下に残

され居るのである。吾等が自己の業によりて恩恵を獲得せんとすればする程いよくキリストをつかむ

事の困難なるを知る。そは彼が信仰によりて知られ且つ解せられざる所にては、よし吾等自身を死するまで苦しめても、勸告も救助も慰安も期待されないのである」と。誠に然りである。キリストを視つめて一歩も退かざる者が自己に勝ち世に勝つのである。

○仰ぎ視よ、神にありて一切は保たれてゐる。一切がキリストに向つて動いてゐる。彼は萬物の目的である(「バスカル」)神は御自身が希望の神にてあり給ふ。吾らは自己や人や世の暗きを見て失望すべきではない。神にありて凡てが善い。ダンテが示されし如く、キリストは星辰の間を凱旋しつゝあり給ふ。あゝ幸なる哉、靜かに神を待つ者、忍ぶ者、主にありて倦まざる者！キリストは永遠に變り給はない。宇宙は彼によりて必ず完成せらるゝのである。

## 日本國と基督教

○今や日本國は聖書の眞理に傾聴すべき時となつた。神の御手著しく此國の上に動きつゝある。時は満ちたのである。人類の歴史と日本國の歴史とを學び且つ基督教西漸の進路を思ひ聖書に基いて現代日本を見る我らに近時益々此の確信を強うする。今は日本の救の時。千載一遇の秋である。知らず、同胞よ、いつまで水溜りを掘るや！ いつまで濁水を飲みつゞくるや！ エレミヤ記二章十三節。きたれ來れ、活ける生命の泉なる聖書に！

○伊藤仁齋曰く「聖門の學は大事なり、其志を立つること大なるを欲す、道を信すること篤きを欲す、而して之を守るに死を以てす、他事の爲に勝たるる事勿れ、俗情の爲に纏はるゝこと勿れ、勇往前一日は一日より新ならん事を欲す、若し其志、功名利達に

ありて聖門徳業の實にあらず詞章記誦を以て足れりとなして道徳仁義の典にあらざる者は此座に預ること勿れ(書齋私祝)と。日本の儒者に此の言があつた。私は其の誠實に打たれる。吾らは此の舊き日本の精神を以て神の言(聖書)を學び而して一度キリストの救を信するならば死を以て之を守る者でなければならぬ。故に吾らは「眞」の基督教(悲しいかな教會は之を示してくれない)を知る爲に先づ舊き日本精神に立還るの急務なるを痛感する。私は私の信仰の恩師より此事を鼓吹せられたる一人である。

○下田より米艦に頼りて海外雄飛を企てゝ失敗せる松陰は獄中にて歌つて曰く「世の人はよしあし事も言はゞ言へ賤が誠は神ぞ知るらん」と。實に大なる確信である。私も彼に倣つて歌ふ「世の人はよしあし事も言はゞ言へ賤が誠はキリストに在り」と。失敗誤解恐るゝに足らず、實に感謝すべき哉。



# 金澤常雄著書

(信望愛社取次)

○説教集「静かなる細き聲」

一圓七十錢  
送料十八錢

札幌在任六年間の説教中より二十數篇を選びて載す。キリスト中心の信仰に立ちて信仰と行爲、來世問題、教會問題、實生活等に亘りて述べたるもの。(向山堂發行)

○「基督教とは何ぞや」

五十錢  
送料二錢

神、キリスト、贖ひ、復活、聖靈、聖書等數項に分ちて福音の何たるかを講述せるもの。

○「進化論と基督教」

二十錢  
送料二錢

○「慰めと光」

十錢  
送料二錢

「病める者の慰め」及び「光の中を歩む者」の二篇より成り、既に多くの人々の慰めとなつた。(殘部少し)

# 信望愛 定價 (送料共)

一、一部 金十錢 一年分 金壹圓

海外 一年 壹圓五拾錢

一、前金の事

一、振替口座東京七八〇二四番

信望愛社宛拂込の事

發行所

東京府千歲村上祖師ヶ谷九八九

信望愛社

東京市麴町區九段坂

市内發賣所

向山堂書房

昭和三年四月二十日印刷納本

昭和三年五月一日發行

編輯發行  
兼印刷人

東京府千歲村上祖師ヶ谷九八九  
金澤常雄

印刷所

東京府西巢鴨町庚申塚一二六  
學園印刷所